

都市空間における モダンガール—ファッションを視点として

青木 淳子

Literary Perspectives on the Urban Fashion of the “Modern Girls”

AOKI Junko

Between the late Taisho and early Showa eras, Modernism came to Japan. Young women with progressive tastes who dressed in Western clothing were referred to as “Modern Girls”. This paper examines the urban fashion of Modern Girls as they were viewed in the literature of the time. Modern Girls adopted many aspects of Western fashion other than clothing. They danced to Western music, and used Western styles of makeup. They were also receptive to Western attitudes and values. As a result, they came to represent a “Western spirit” to writers of the time. For male writers, Modern Girls were stereotyped as urban temptresses. By contrast, for female writers, Modern Girls might attract men, but did not invite their attention. Their fashion was for themselves, with the purpose of shopping — and being seen shopping — in department stores.

1. はじめに

大正末期から昭和初期にかけて、西洋風俗の流入と雑誌や新聞といったメディアの発達によってモダニズムが世間を席捲した。そういった風潮のなかで、モダンガール¹⁾という新しい時代の女性像が表出した。モダンガールは

「断髪・洋装・洋風化粧に表象²⁾」され、ファッションを読み解くことでその一面を知ることができる³⁾。本稿では当時の文学作品の中のモダンガールのファッションについての表現を論考の対象とする。

私たちが過去のファッションについて知ろうとするとき、まず資料とするのは当時発行された雑誌に掲載された写真やイラストなど視覚的なものであり、衣服や髪形といった服飾の形やバランス、カラーであれば色、といった情報を得ることができる。しかしそこから、動きや香りという、感覚的な事柄を知ることはできない。本稿では文学のテキストから、視覚的資料からは得ることのできない、装い方やしぐさといった情報を読み取り、モダンガールという近代の新しい女性像の一面を読み解くことを試みる。

ヴァルター・ベンヤミンは都市とファッションの関連を『パサーージュ論』の中で「まったくふさわしい場所にあるものなどはないのであって、モード⁽⁵⁾ファッション)がすべてのものの場所を決める⁶⁾」とアルフォンス・カールの箴言を挙げ、都市が成立していく上で、モードつまりファッションがいかに重要な役割を果たすのかを語っている。清澤冽はその著書『モダン・ガール』の中で「ある時電車の中で、わたしは喉の下あたりから、グルグルと帯を巻いている女を見た。鯨の昆布巻きを半分に切つたやうな形である。あれはなんだいとある物識りに聞いたら、それが近頃流行のモダン・ガールの服装だとのことであった⁷⁾」と、電車が走る都市空間の中での出来事を述べている。特徴的なファッションを持つモダンガールはこうして都市の発達とともに存在した。また、都市とモダンガールの関連については先行研究でも指摘されている。モダンガールの登場に先駆けて、大正時代の女性の生き方として「職業婦人⁸⁾」が挙げられるが、吉見俊哉は「帝都とモダンガール」の中で、職業婦人とモダンガールについての言説やイメージが、「同時代のメディアの中で爆発的に増殖し、この時代の都市風景を枠づけていく⁹⁾」と述べている。

また、文学における「空間」については前田愛が『都市空間のなかの文学』で「文学テキストを構成している言語記号は、数学の記号のように、純粋な意味と読者とを媒介するものではない。それがあらわしているのは、読者と非現実の世界との界面である。界面としての言語記号が消失し、表象として

の空間をつつみこむかたちで、現出する非現実の世界のひろがりこそ、読書行為によって現働化されたテキスト空間のひろがりそのものなのである。¹⁰⁾』と、述べている。前田は勿論、当時の文学作品の中に表現された事柄そのものを「空間」として捉えているわけだが、この前田の解釈を援用し、拙論においても当時の作家が描いた文学作品から立ち上ってくるモダン都市空間と、そこに生成するモダンガールを採り上げることとする。

研究対象は、モダンガールが先端的な女性像として一世を風靡した大正末から昭和初期にかけて発表されたモダニズム小説を中心とする¹¹⁾。また、当時の雑誌に掲載された論評やエッセイをも含める。これらが当時のモダンガールという言葉説を形創ったと考えることができるからである。

第2章では、都市とファッションの交錯するさまについて当時の小説からその表現を抜き出し、いくつかのプロトタイプにまとめる。そしてそこから見えてくるモダンガールの諸相について、第3章で大衆の中に存在した階級意識と、モダンガール表象におけるセクシュアリティとジェンダーを視点にまとめる。

2. 都市とファッションの交錯

1923（大正12）年9月1日、関東地方に発生した関東大震災は甚大な被害を及ぼした。震災の翌日、第二次山本権兵衛内閣が成立し、内務大臣後藤新平は東京復興の基本方針を「帝都復興の議」として提言する¹²⁾。このような政策を背景に、東京は帝都として形成されていく。その過程で銀座は享楽と消費の場として、丸の内はモダンガールの働く場所として、当時の小説にファッションの表現とからめられながら記述されていく。

(1) 街路と靴音

① 銀座街頭

大正15年5月9日の銀座街頭での服装に関する調査によると、通行人の女性の洋服の割合は1パーセントにすぎなかった¹³⁾。この調査の主導者だった今和次郎は当時の銀座を次のように記述している。

「銀座一首都の心臓、時代レビューの焦点。夜、尾張町の角に立って

青木 淳子「都市空間におけるモダンガール—ファッションを視点として」

街上風景を見る、聞く。—電車のスパーク、自動車の警笛。オートバイの爆音。—ショーウインドーのきらめき、広告塔の明滅、交通整理ゴーストストップの青と赤。一人間の氾濫、男、男、女、女、男女、女男、ノックスの帽子、アッシュのステッキ、セーラーパンツ、和服に断髪、ドンファンハンドバッグ、膝までのスカート、脚、脚、フェルト、支那靴。—ショッピングガール、ダンスガール、ストリートガール、マッチガール、喫茶ガール。どこからか流れてくる蓄音機のリズムに合して唄ふモボモガの一团¹⁴⁾」(今和次郎「懐古恋想銀座柳」昭和4年中央公論社)

ここには銀座街頭の自動車やバイクの音、音楽、そこにひしめく男女の息遣いやせわしなく動く人々の群れが表現されている。この光景が夜の印象を持つとすれば次の文章では、昼間の銀座の光景が描かれている。

「キリ子は脚を重ねる。そして草野に気づかれぬように、自分の脚の脛脛の線に眼を移す。(大丈夫。)彼女の眼の方向、彼女の靴のつま先の遙か下方に、G街の西側の歩道がある。彼女の靴の踵の処に、A洋書店のショウ・ウインドウが半分見える。その隣がQ時計店。Y食料品屋。三四軒離れた所に婦人洋服屋のカヌ。その前に立って男が二人。一人はステッキに身体をもたせて、マヌカンに着せた婦人服を見ている。¹⁵⁾」(伊藤整「M百貨店」『新科学的文芸』昭和6年5月号)

この小説からは街の復興の音も聞えてくる。

「キリ子は眼をあげる。前方にリヴェットをうち込むはげしい音を、都市の上空一ぱいに響かせてS銀行の七層ビルディングが増築工事をしている。Briiriri rUrUrUrU rrrrrrUU 起重機が鉄材を釣りあげる¹⁶⁾」(伊藤整「M百貨店」『新科学的文芸』昭和6年5月号)

そして、人々がおしゃれをするために集う場所としての銀座には次のような独特の匂いと音がある。

「二階のビューティ・パーラーの髪の毛の焼ける臭気と、鋸のかみあう響と、シャンプーする水の流れる音に交錯した。¹⁷⁾」(吉行エイスケ「女百貨

店」初出『近代生活』昭和5年2月号）

② 丸の内

丸ビルは大震災の被害を奇跡的に免れた。そしてそれは復興の希望でもあったといえるだろう。丸ビルに働くモダンガールが昭和二年その「不品行」な行いで新聞沙汰¹⁸⁾になるという「場」でもあった。丸の内には銀行や一流企業が軒を連ねた。ビルのコンクリートと石畳といった硬質の空間に、スカートにハイヒールのモダンガールが靴音を響かせて闊歩する。

「太田ミサ子の黒いスカートが冷たい路上で地下の電光に白く煌いた。彼女の横顔が官街と銀行と、店舗のたちならんだ中央街の支那ホテルのまえまでくると細かく顫えた。¹⁹⁾」（吉行エイスケ「女百貨店」初出『近代生活』昭和5年2月号）

この太田ミサ子は女性実業家である。

「一刻後、太田ミサ子はタクシーのクッションにもたれて官省広場の並木道を疾走していた。大島のかさねを黒いコートでつつんで、リスの毛皮を左乳に垂らした、頬紅をささない蒼白な厚化粧の女が、いつも一点をみつめ前後の気配を感じずる都会の女の乗った車が、中央九番街のクロス・ワード模様の東洋銀行のまえで停止すると、彼女のフェルトの草履が石畳を踏んで衣服の黒い裾裏が地上を流れる風にはねかえった。²⁰⁾」（吉行エイスケ「女百貨店」初出『近代生活』昭和5年2月号）

彼女がタクシーを走らせ、そこから降りる光景から、都会で働く女性が持つ時間の「速さ」と、着物の裾裏が風にはねる描写からその活動的な様が伝わってくる。

③ 百貨店

「今日は帝劇 明日は三越」という言葉は大正3、4年頃、三越と帝国劇場が提携してプログラムに掲載したことばである²¹⁾。百貨店は「売子」という職業婦人の仕事の場でもあり、また買い物客にとっては娯楽の場としての要素も持っていた。

「化粧品部で一人の鼻の高い売娘に色々な形の化粧水の瓶をとり出さ

せて、キリ子は選択している。その斜後方から、草野はキリ子の細い白い指に玩ばれる、白色の、淡紅色の、緑色の美しい瓶を、美しく刈りあげられた切子の首筋を、鼻の高い売娘の顔を見ている。(フランスから、パリからそれ等は来ている。髭の美しいフランスの男達。ウビガンとコティ。オオ・ド・コロニユで身体を拭くことが非常に健康に宜いと、ボナパルトは考えた。)²²⁾」(伊藤整「M百貨店」『新科学的文芸』昭和6年5月号)

キリ子は刈り上げられた、つまり断髪のもダンガールであるが、この場面は美しい化粧水の瓶とそれを開けた時の香りを連想させる。また先に述べたように、この頃の百貨店の様々な媒体への広告は人々の耳目を集めた。

「さち子はふと見た瞬間、流行雑誌の口絵を連想せずにはいられなかった。雪子はまさに、三越か松屋のモデルに雇はれた映画女優だった。²³⁾」(ささきふさ「春浅く」初出1928年3月)

④ 劇場・ダンスホール

人々が集う場所として劇場やダンスホールがあった。そしてそのような衆人環視の場でこそ、モダンガールの意識も一際高まった。

「萬嗟子は会場の方へ青年と睦じさうに、肩を並べてみた。女王のやうな歩みに、四邊に瞳も散らさない気位が、すれ違ふ人を振り返らせた。²⁴⁾」(小林きよ「火の鳥第5回」『婦人グラフ』昭和2年5月号)

ダンスホールという空間には様々な人々が集う。

「此の建築の内部は、やはり夢の続きのように豪華を極めたものだった。が集まった男女は決して夢の中の男女ではなかった。もう短すぎるスカート、音楽をこなしきれぬ脚、土の着いた靴底—フリッピン等の六白の目には、無遠慮な軽侮の嗤いが浮かんでいる。」(ささきふさ「ただ見る²⁵⁾」『モダン TOKIO 円舞曲』昭和5年春陽堂)

状況を冷ややかに見るこのようなモダンガールの視線もあった。

(2) 青バスの白襟と都市の拡がり

青バスは大正八年から営業を始めた乗り合い自動車である。大正9年2月2日から白い襟の制服を着用した女性の車掌が乗車し²⁶⁾、「白襟」と呼ばれた。

「靴下の細っそりした白襟嬢は、車掌用語にでもあるらしく、『細かいのはありませんか。』とつんとしている。²⁷⁾」（「青バスの女」辰野九紫 初出『新青年』昭和4年1月号）

そしてこの青バスは東京市内を循環していた。

「流石東京のことで、広くて狭くもあるが、狭くて広くもある。一新橋を基点として、上野浅草両方面に本石町で分れて循環するのと、新宿築地、丸ノ内回りと、一至って簡単な運転系統である青バスの女車掌と限定されてあって、そのコース以外には脱れる気遣いのない白襟嬢に、廻り会うことすら、仲々天候に恵まれないのだから…²⁸⁾」（「青バスの女」辰野九紫 初出『新青年』昭和4年1月号）

当時の職業婦人の代表的存在である青バスの白襟に興味を覚える紳士の子であるが、この語りから私たちは当時の東京市内の代表的なルートも知ることができる。

また都市のさらなる拡がりには省線電車がつくっていた。

「第四プラットホーム、東京行。…（中略）プラットホームは会社員と職業婦人と男の学生と女の学生で一杯だ。会社員よりも職業婦人が美しく、男の学生より女の学生の方が匂いがするだけそれ丈新鮮だろうと思う。²⁹⁾」（林房雄「省線りレー 新宿一神田」『近代生活』昭和4年4・8月）

「白い水兵服の少女が三人、発車間際に息をはずませて飛込んで来た。エンジンドアがスルスルと閉まると、辛うじて座席を見つけた二人が、ゴツンと動いた車台にキャッキョッと一方へよろめいたが、一人がドア際へ残されて、客席を背にムズムズと何やら動き渋った。一襟脚を男の

青木 淳子「都市空間におけるモダンガールファッションを視点として」

子の様に短く刈込んだ大人びたおかっぱ。³⁰⁾」(龍膽寺男「省線りレー風景 上野から新宿へ」『近代生活』昭和4年8月)

ここでは電車内の空間と、女学生のような三人のモダンガールの明るく、澆刺とした様子が伝わってくる。

(3) 山の手の令嬢

省線や青バスは銀座や浅草といった消費と娯楽の街と、人々の住む山の手や郊外とを結ぶツールでもあった。そしてしばしば山の手の令嬢が話題となった。

「目黒は…(中略)…何時だって、綺麗なお嬢さんたちが沢山乗込んで、車内を温室のように見せるのだが、一体、これらのお嬢さんたちは、どこから流れ込んでくるのだろうか。³¹⁾」(久野豊彦「省線りレー風景 新宿より品川まで」『近代生活』昭和4年8月)

そして令嬢は、次のように語られている。

「大森から馬込へつづくある坂の砂利路を、黒いコートで身を包んだ一人の少女が、滑りさうになる草履の爪先を気にしながら登って行った。彼女を飾るものはすべて黒と赤の色彩だった。コートと手袋と襟巻きとの黒、襟と八つ口と草履の緒との赤—ことに黒い毛皮の襟巻きの間から覗いた臙脂かつた天鵝絨の襟が、彼女の顔をよけい美しく見せてみるやうだった。³²⁾」北川千代『婦人グラフ』昭和2年1月号)

「少女」という年齢にしては着物を「黒」で統一し、赤を挿し色にしていくところが、モダンな取り合わせである。着物の脇の身八つ口や襟もとから、歩みに合わせてチラチラとかい間見える赤や臙脂色が、その動きを優雅にしかし時には扇情的に見せることだろう。

3. モダンガールの諸相

(1) 大衆に内在する階級意識

モダンガールは一口で語られるものではない。それはイメージであり、新しい女性の表象であるからだ。当時富裕層から職業婦人まで、様々な階層に「モダンガール」と標榜される人物が存在した³³⁾。

「さて時代は千九百二十七年の午後二時半、…一台の自動車が丸ビル北側口に停まりました。中から現はれましたのがオレンジ好みの洋傘の御令嬢、首には真珠の首飾り、左手首には銀の腕輪が二つ嵌められてゐる。服装といひ、装身具といひ、肉付き顔立ちといひ、オヨソ金持ちモガと察せられます。³⁴⁾」（今和次郎・吉田謙吉『モデルノロジオ考現学』）

と、ここでは「金持ちモガ」が少々皮肉交じりに観察されている。また、それと対象的なのが、職業婦人としてのモダンガールである。

「夜の一時、新宿のプラットホームに三人の女が立っていた。モダンな令嬢風の服装ではある。口唇の濃い、一人は断髪で、ホームの印象はこの三人を中心としていた。³⁵⁾」（浅原六朗「省線リレー風景 深夜の乗客その他」『近代生活』昭和4年8月）

令嬢風であっても、夜中の一時に新宿駅から乗車するのはカフェで働く婦人であった。この時期流行した洋服のデザインは、直線的で、衣服製作も容易であった。実際雑誌にはワンピース等の型紙が掲載され、裁縫の心得があれば裁断、縫製が可能であった³⁶⁾。このような状況が、「洋装のモダンガール」の存在を広い層に渡って可能にしたといえるだろう。

しかし、貧富だけではなく、その人物の背景となる文化や教養も本来の意味の「モダンガール」にとっては大切なものであった。例えばこのように富裕層の令嬢で、語学にも堪能なモダンガールも表現されている。

「萬嵯子は流暢な英語で大名のおかごだの、挟筈など、それから人形の浦島や、雨乞小町の来歴まで説明して聞かせた。³⁷⁾」（柳原燐子「火の鳥」『婦人グラフ』昭和2年3月号）

当時の理想のモダンガールとされたささきふさは彼女の小説の中で、モダンガール間に存在する貧富や文化の程度の差を感じとった次のような文章を書いている。

「私は、ダンサーたちの髪や服装やプロポーションなどを仔細に観察していた…（中略）…だが何という労働、一私の嗅覚は男の体臭や口臭よりは寧ろ機械油や汽船の臭気を堪え易く感じる。それに一回八銭とは、一私は思わず手廻りのものを一回のダンスの報酬で割ってみた。靴下五〇回。靴四〇〇回。手提五〇〇回。手袋二〇〇回。帽子二〇〇回。ペティコート一〇〇回。イヴニング・ドレス、外套に到っては、換算の限りではない。私は茫然とした。茫然とした私の目に、彼女達のお粗末なワン・ピースや田舎臭いスウエターは、決してもう見にくいものではなかった。すると私には、ロー・ネックのぴらぴらしたドレスをつけ、誇りがに踊っている二三のスターが不思議に思われ出した。基数を八銭において、彼女等は食べなければならない。寝なければならない。着なければならない。一枚のドレスの背後には、いったいどれだけのいたづきと、どれだけのやりくりと、どれだけの屈辱が隠れているのであろう。³⁸⁾」（ささきふさ「ただ見る³⁹⁾」『モダン TOKIO 円舞曲』昭和5年春陽堂）

当時モダンガールと標榜されていたささきの著述から、モダンガールに内在する葛藤をも知ることができる。

(2) セクシャリティーとジェンダー

当時のモダンガールに関して記述された文章を詳細にみていくと、男性によって書かれたものと、女性によって書かれたものでは傾向に違いがあることがわかる。

① 男のまなざし

男性が描くモダンガールは男性を魅惑するものが多い。

「太田ミサ子は、ソファに片脚あげて、ストッキングを結んだ華美な薔薇の花模様の結び目をゆるめると、「いくら破廉恥でも淫売婦の逢ひ

曳きじゃないのよ⁴⁰⁾」（吉行エイスケ「女百貨店」初出『近代生活』昭和5年2月号）

と、女性から大胆なポーズをとることがあり、また時には表立ったものではなくとも、暗示的な場合もある。

「よこに投げだされた脚が、薄い絹靴下のため、白い皮膚を、私の肌を感じさせる。この女のそった唇が、何を要求して私のところにきたのであろう。女はここが自分の寝室でもあるかのように、落ち着いている、ゆったりと、口紅のなかから、白く煙をふいている。私も同じように煙草を吸い女をながめた。二本目の萁を吸い終わって、私は女に訊ねた。『で、どんな御用なんです？』⁴¹⁾」（浅原六朗「丸の内の展情」『モダンTOKIO 円舞曲』昭和五年春陽堂）

銀座街頭での調査で、婦人の洋装姿が一パーセントだった⁴²⁾時代に、つまり成人女性のほとんどが着物を着用していた時代に、むき出しの「脚」は男性にとって滅多に眼にするものではなかった。脚の持つセクシャリティーはしばしば男性の描くモダンガールが付帯するものである。それは洋装のスカートだけでなく、着物の裾の乱れとして表現された。しかしまた

「短いスカートや肉色の靴下からは魅力や美しさは発散しない。ただ下劣な誘惑ばかりだ。」（村山知義「女と衣服」『婦人グラフ』昭和2年2月号）

と、そのセクシャリティーの価値を批判的に捉えているものもある。

② 女の立場

一方、女性の描くモダンガールは前面にセクシャリティーを押し出したものは少ない。男性を誘うように書かれたこの一節も表現はあからさまではない。

「怒の沈まつた瞳に、媚笑を浮かべながら、少し甘えた口の聞きやうに、親しみを深めてわざと、椅子を彼の方へづらせた。青年は明らかに慌ててゐた。…（中略）…小指を一寸そらした気取った手つきで、形の

良い帽子の下の耳の辺りの巻毛を押さへたりした。⁴³⁾」(小林きよ「火の鳥第5回」『婦人グラフ』昭和2年5月号)

そして男性を翻弄するのが近代的なモダンガールである、と考えながらも、心が揺らぐさまが次のように描かれている。

「オホ！こんなにモダンガールが参つては駄目々々。モダンと言ふものは先ず異性に自心をあく迄興へ切らずに近代をひ廣く呼吸づいて美しく、そして賢く常代に若く生きる處に第一の要素が含まれてあるんだから…⁴⁴⁾」(山田順子「火の鳥第四回」『婦人グラフ』昭和2年4月号)

女性が描くモダンガールについてあからさまに「性」と結びついた表現は少ない。しかし、モダンガールのファッション表現のうちで常に男性に意識される「脚」に関連する「靴」について、女性の内面における性的な欲望と結びついたともいえる次の表現がある。

「さち子は弾力を秘めた側面の革が、やんはりと足の肉を締めるのを快く意識した。彼女は其処から這ひ上がつて来る仄かな動物的な匂ひさへ、陶然と嗅いだ。いや彼女は其処に切り出された彼女自身の脚の線を、何か人のもののやうに、陶然と見てゐたのだつた。⁴⁵⁾」(ささきふさ「春浅く」初出1928年3月)

これは実際にハイヒールを履いた経験をもつからこそできる感覚的な表現であるが、脚にたいするまなざしは、「何かひとのもの」ように客観的である。しかしそれは同時に、男性から見られるものとしての脚を意識した表現でもある。

モダンガールとして名高かったささきふさは男性と女性の関係を次のように述べている。

「モダンとクラスイクトを分かつまでもなく、男性が女性に対して何等かの関心を—或は野心を持つ限り、前者は后者の敵であり同時に味方であるといえませう。つまりその関心か野心かが女性を育て、生かす場合には男性は常に女性の味方でありますし、反対に女性を傷つけ、踏み

踊る場合には呪ふべき敵となるわけです。…（中略）…モダン・ボーイといふものは表面小奇麗なやうに見えてその実なにか不潔な毒気を持つたものに思えはしませんかしら？ 明敏を誇る天下のモダン・ガール諸嬢よ、どうか貴嬢の遊び相手の此の毒気に感染しないやう、よく気を付けて下さい。⁴⁶⁾」（ささきふさ「モダン遊びの相手」『女性』大正15年11月号）

男性作家によって描かれた男を蠱惑するモダンガール像は、モダンガールのセクシャリティーを誇張した。ささきの論点から言えば、モダンガールを描く作家もまた注意すべき相手だったともいえる。

4. おわりに

モダンガールをテーマとした都市とファッションの交錯する表現から、当時の東京という街の音や匂い、人々の動きや建物、そして東京という街の拡がりといった空間性をも読み取ることができる。そしてモダンガールが着用した洋服や化粧、踊ったダンスのステップは、パリやアメリカといった西洋からもたらされたものであり読者の意識の中では、その空間は海外との接続をも可能にした。

モダンガールは都市空間において、そのファッションで「男」を誘惑する。それは男性が描くステレオタイプของモダンガールである。女性が描くモダンガールの多くは、「男」を魅了するが、多くの場合「男」を誘わない。そしてそのファッションは常に自己認識のためのおしゃれであり、同時に百貨店での消費の対象でもあったといえる。しかし、モダンガールとみられる人々は様々な階層に存在し、商品や教養に関する事柄の消費形態も様々であった。

モダンガールは当初、「自立を試みる近代的精神を持つ新しい女性像」として提言された⁴⁷⁾わけだが、モダンガールには様々な諸相があり先行研究においても色々な視点で論じられ、一言で表すのは困難である。それは当時の小説に描かれたモダンガール像が、本稿でみてきたように、小説というメディアにおいても、様々な言説を創り出していったということも一つの要因

としてあげることができる⁴⁸⁾。

【注】

- 1) モダンガールという言葉の初出は、『読売新聞』1923（大正12）年1月7日～14日まで長梧子によって書かれた「滞英日記 近代の女」であり（佐光美穂1998年12月「新しくあること、新しさを書くこと、モダン・ガールを書くこと—大正10年代の文学的状況の中のモダン・ガール」『名古屋近代文学研究』名古屋近代文学研究会16号 p.136）、その長梧子が、当時の評論家北澤秀一である。（垂水千恵2006年『コレクション・モダン都市文化 第16巻 モダンガール』ゆみに書房 p.678.）そして北澤は雑誌『女性』大正13（1924）年 pp.226-237で、モダンガールについて自著の形で述べている。
- 2) 中山千代『日本婦人洋装史』吉川弘文館 1987・1988年 p.386
- 3) 青木淳子「モダンガールのファッション—大正末から昭和初期の洋装化の過程にみる」『国際服飾学会誌』第16号 1999年 pp.75-90において雑誌のグラビア写真及び記事よりモダンガールのファッションについて読み解き、当時の典型的なモダンガールファッションについて規定した。また「女子和装における洋風趣味—モダニズムを背景に」『国際服飾学会誌』第22号2002年 pp.65-82において、先行研究ではモダンガールは「洋装に表象される」とされていたが、和装のモダンガールといわれる女性もいたことを指摘した。
- 4) ファッションという言葉はしばしば流行という意味を連想させるが、ここでは衣服、髪型、靴、アクセサリ、化粧といった身体をとりまく服飾を直接的に指し、なおかつ衣服の纏い方や振舞いといった動きをも総称しファッションと定義する。つまり、ある意味身体と同義であるともいえる。ファッションは、それを纏う人を表象するものと捉える。
- 5) 著者注 ここではモード（仏語）とファッション（英語）は同義語とする。
- 6) ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 I パリの原風景』岩波書店 1993年 p.119
- 7) 清澤冽『モダン・ガール』金星堂 大正15年 p.181
- 8) 青木淳子「雑誌記事にみる職業婦人の装い—洋装化を視点として」『東横学園女子短期大学紀要』第40号 2006年 pp.53-67 大正7、8年頃から一般女子事務員やタイピストが増加し、大正末から洋装の職業婦人が増え、一部モダンガールと言われた。
- 9) 吉見俊哉「帝都とモダンガール」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生—戦間期日本の文化変容』柏書房 p.237
- 10) 前田愛『都市空間のなかの文学』1992年筑摩書房 p.20
- 11) 都市という視点で纏められた後述する二冊の著書に掲載されたもののうち、1920（大正9）年から1931（昭和6）年に発表されたものを中心とする。これは拙論「モ

ダンガールのファッション—大正末から昭和初期の洋装化の過程にみる」（前掲）p.79により、「モダンガールというステレオタイプが新しい美の象徴であった時期」を基準とする。しかし、作品に表現されるのにはこれ以降のタイムラグを考へ1934（昭和9）年までを範囲とする。

2冊の著作は次に挙げる。海野弘編『モダン都市案内 モダン都市文学Ⅰ』平凡社 平成元年 鈴木貞美編『モダンガールの誘惑 モダン都市文学Ⅱ』平凡社 平成元年

また当時発行されモダンでありかつ海外のファッション情報を多く掲載した婦人雑誌『婦人グラフ』（国際情報社発行 月刊 大正13（1924）年5月～昭和3（1928）年発行）に掲載された小説のうち、モダンガールをテーマとした連作小説「火の鳥」と、当時モダンガールと標榜された佐々木房子（旧姓 大橋房子のちペンネームささきふさ）の小説、エッセイも対象とする。佐々木の作品は主に当時モダンガールというテーマを多く採り上げた雑誌『婦人画報』と雑誌『女性』に掲載されたものも採り上げる。但し年代は先に挙げた部分に絞る。

先行研究として豊田かおりによる研究ノート「モダニズム文学にみるモダンガール」（『文化学園大学紀要』2014年1月 pp.101-104）があるが、龍胆寺雄『放浪時代』と広津和郎『女給』を材料とした限定的なもので、ファッションというより主人公の行き方に分析の焦点があてられている。本稿というより今後の筆者の研究の参考とする。

- 12) 越沢明著『東京の都市計画』岩波新書 2000年 pp.37-38
- 13) 今和次郎・吉田謙吉『モデルノロジオ・考現学』春陽堂 昭和5年8月 p.24
- 14) 今和次郎『新版大東京案内』筑摩書房 2001年 p.119
- 15) 海野弘編 前掲書 p.239
- 16) 海野弘編 前掲書 p.239
- 17) 鈴木貞美編 前掲書 p.129
- 18) 昭和2年4月20日東京日日新聞「モダンガール恐慌時代来る」という見出しで丸ビルに勤務するタイプライターなどの風紀の乱れが記事になり「職業婦人＝モダンガール＝不良」という世間の評判が流布されることとなる。（青木淳子 前掲 1999年 p.80）
- 19) 鈴木貞美編 前掲書 p.120
- 20) 鈴木貞美編 前掲書 p.126
- 21) 初田亨『百貨店の誕生』ちくま学芸文庫 1999年 p.139
- 22) 海野弘編 前掲書 p.233
- 23) 女流文学界編 前掲書 p.200
- 24) 『婦人グラフ』昭和2年 5月号 p.3
- 25) 海野弘編 前掲書 p.129
- 26) 鈴木貞美編 前掲書 p.108

- 27) 鈴木貞美編 前掲書 p.107
- 28) 鈴木貞美編 前掲書 p.111
- 29) 海野弘編 前掲書 p.418
- 30) 海野弘編 前掲書 p.422
- 31) 海野弘編 前掲書 p.426
- 32) 『婦人グラフ』昭和2年1月号 p.1
- 33) 青木淳子 前掲1999年 p.79
986年 p.138
- 35) 海野弘編 前掲書 p.429
- 36) 例えば昭和2年『婦人画報』12月号には「最新の婦人服二種」という記事で、写真と裁断図が掲載されている。(青木淳子前掲 1999年 p.77)
- 37) 『婦人グラフ』昭和2年3月号 p.4
- 38) 海野弘編 前掲書 p.133
- 39) 海野弘編 前掲書 p.129
- 40) 鈴木貞美編 前掲書 p.120
- 41) 海野弘編 前掲書 p.162
- 42) 銀座街頭での調査。今和次郎・吉田謙吉『モデルノロジオ・考現学』昭和5年8月 春陽堂 p.23
- 43) 『婦人グラフ』昭和2年 5月号 p.2
- 44) 『婦人グラフ』昭和2年 4月号 p.3
- 45) 女流文学界編『ささきふさ作品集』昭和31年 中央公論社 p.233
- 46) 鶴見俊輔監修『雑誌 女性 覆刻版 第三二巻』1992年 日本図書センター p.266
- 47) 北澤秀一「モダン・ガール」『女性』大正14年8月号 pp.226-237
- 48) 本稿は2010年6月26日日本文学協会発表大会(於:フェリス女学院大学緑園キャンパス)において発表した内容(「モダン・ガールと都市空間—文学におけるファッション表現」)をまとめたものである。ご助言、ご意見を下さった島村輝先生、その他、会場の皆様に深謝申し上げます。